



「きぼうのいえ」の人たちとあひ。後列中  
が山本雅彦さん

訪問インタビュー

霊の働きが見える街で

東京・山谷 ホスピス「きぼうのいえ」

昨年、本紙でも「見捨てられた人のためのホスピス」(2002年12月号(自費))として取り上げたきぼうのいえ(東京都台東区)。重篤な病状や複雑な事情から行き場を失った人々を助けようとする施設である。前回の取材から4カ月。再び、この施設を支えた施設長の山本雅彦さん(カトリック神職、牧師、39歳)に話を聞いた。

「まず、前回の記事の冒頭に驚きました。これは施設に入っている人々のキリスト教祈願を見られない。本紙への痛しい言が投げかけられた。「私は、ここにいる人たちをかわらざるごとく思っています。社会的に適応が難しいなど、いろいろな事情からホスピスになさざるを得なかった人ではあるのですが、人としての価値は何ら変わらない。このことは教会の人を当然かかっていると思つて」

「きぼうのいえ」を始める師匠が二番目と思つています。自分の場合、めどなき山本さん(山谷)と「などという気持ちがあつたわけはない。「山谷に来ればキリストに委ねる」というわけはありません。電報も大抵の事柄も山本さんにも、本音の価値観に委つかなければ、心の悪い状態の人たちがいます」

「山本さんは、自分が物質的に貧しい人々の中に飛び込んだという意識は全くない。好きなこととを教み、クラシック音楽を聴きながら、おじさんたちと一緒に生きていくという。「山谷は、これだけではないという規範に押しられないところがあるから、自分の流儀を追求できる。ただ、自分をキリスト教にしない自戒は必要です」

山本さんは、かつてつづつと9年間引きこもり、苦悶した体験を持つ。その時、救いを神に絶叫した。しかし、事実は一向は好転しなかった。「祈りは聴かれても、自分の思うように解決することははない。ただ、今は、自分の身の丈に合った自然の流れにまかせ

人生の舞台を終えた役者に拍手を贈る

ねぎらいの気持ちと  
祝福の思いを抱いて

それは現場で折るという。それは継続的な

道者とは異なる、自分なりの歩みです」

「入居者も同じようにそれぞれの歩みがあり、その両者が『きぼうのいえ』で出会う『我々』の出会いは、そこに必ず神が臨在している。私は信じています。だからここではいわゆる社会的常識的な生活指導はしない。私は相手は今、いのちの終わりというゴールにひたむきに向かうのを手助けするだけ。今の生における反省を持つて次の生へと向かっていたらそれを真実としている。それが『きぼうのいえ』の霊性の求める極点です」

「私たちは、この世を走り抜けていく人と一緒に人生を駆け抜ける。マラソンランナーのようなものです。と云う人たちは、私は『心安らかに去りゆけ』という祈りを胸に抱いて、この苦勞地を

と、この世を過ぎ越してゆく祝福の思いを抱きま

す。人生の舞台を終えた役者に喝采の拍手を贈る気持ちでしょうか」

山本さんは、存在の根源の大きな力に動かされて、この仕事をしているという。しかし、決して無難な英雄志向ではない。

「人間が救済者層群になつたとき、おぞましい奇蹟になることを守るべきです」

「山谷は異にならぬ魂のうめきや叫びに響かされています。それは、『助けをください、私は霊に乏しく、今日暮るる糧がないのです』というキリストへの囁きです。そして、『きぼうのいえ』にあなたの師匠があなたを救った」という救いや恵みや癒しが人の行いのうちに現れる。これはまさに霊の働きが見える街といえるでしょう」

「ここで働く人たちは

中には、仏教僧侶や無宗教の人もある。山谷では、信仰が持たない人が極めて信仰的な生き方をしているのを自覚することも多いのですが、これはその人の霊がキリストを知っているのかもしれないはずだ」と山本さんは話す。

「今は施設をもつていこうという活動的な使徒と、心をこめてする同じ愛の人々と静かに祈りつづけています」

「『きぼうのいえ』の歩みは、霊に生かされた共同体となつていく民の歩みなのですよ。これは単なる社会福祉施設ではありません」

「こまめに、ちよと重くたがな」と山本さんは照れくさそうに笑った。

「ほんはただ、天眞無邪に、のりりやりたいたはなごきよ」(川)